

国語(現代文)

東京大学 (前期・文科) 1/4

<総括>

文科 出題数	現代文2題・古文1題・漢文1題	試験時間150分
理科 出題数	現代文1題・古文1題・漢文1題	試験時間100分

テクノロジーが人間の倫理の虚構性を暴き、人間の倫理を変質させていくことを論じた文章。昨年度よりも本文の抽象度が高くなった。設問の方では、例年六題出題されていたが、二行の説明問題が一題減となり、全体で五題の出題となった。設問数は減ったものの、より丁寧な説明を作成することが求められているため、全体として難化したと言えるだろう。

<本文分析>

大問番号	第一問
出典 (作者)	伊藤徹『芸術家たちの精神史—日本近代化を巡る哲学—』(ナカニシヤ出版、2015年刊)の第六章〈「神々の永遠の争い」を生きる〉の一節
頻出度合 ・的中等	入試であまり出題されない著者であるが、東大では2004年度の第一問で同一著者の文章が出題されている。
分量 前年比較	分量 (減少・変化なし・増加) 約3180字。昨年よりも約680字増。
難易 前年比較	難易 (易化・変化なし・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
第一問	現代社会論	(一)	記述	やや難	「科学技術の展開」がどのような点で「不気味」と言えるのかを説明する。
		(二)	記述	やや難	「単なる道具としてニュートラルなものに留まりえない」ということが指している内容を押さえた上で、そのことと科学技術が『『すべきこと』から離れている』こととの因果関係を説明する。
		(三)	記述	標準	傍線部直前の「そういう意味で」が指している内容と、直後の段落の具体例の内容を踏まえて、「虚構」性を説明するとともに、「明らかだ」と言える理由も含める。
		(四)	記述	やや難	従来の倫理基準のあり方と、それが「テクノロジー」によってどのように変質しているのかを、「本文全体の論旨を踏まえ」て説明する。
		(五)	記述	標準	一昨年、昨年度同様、三問の出題だった。

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

様々なジャンルの評論を読み、そのテーマに関する理解を深めるとともに、文章の論理構造をしっかりと把握できるようにしたい。

書くべき要素を的確に捉え、簡潔明解にまとめる練習をしておこう。

国語 (古文)

東京大学 (前期・文科) 2/4

<総括>

文科 出題数	現代文2題・古文1題・漢文1題	試験時間150分
理科 出題数	現代文1題・古文1題・漢文1題	試験時間100分

オーソドックスな出題であった。

<本文分析>

大問番号	第二問
出典 (作者)	『源氏物語』 真木柱
頻出度合 ・的中等	頻出出典。この箇所の出題は稀。
分量 前年比較	分量 (減少・変化なし・増加) 約940字。前年より約40字増。
難易 前年比較	難易 (易化・変化なし・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
第二問 (文科)	物語	(一)			
		ア	記述	易	現代語訳。
		イ	記述	やや易	現代語訳。
		オ	記述	標準	現代語訳 (「めや」は反語を表している)。
		(二)	記述	標準	心情説明。
第二問 (理科)	物語	(三)	記述	難	心情説明。
		(四)	記述	やや難	内容説明 (「なし (為す)」の語義に注意)。
		(五)	記述	やや難	内容説明 (設問に「ここでは」とあることに注意)。
		(一)			
		ア	記述	易	現代語訳。
	イ	記述	やや易	現代語訳。	
	エ	記述	標準	現代語訳 (「めや」は反語を表している)。	
	(二)	記述	難	心情説明。	
	(三)	記述	やや難	内容説明 (設問に「ここでは」とあることに注意)。	

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

古文を読解する上で必要な知識項目を習得するとともに、文章を一語一語丁寧に読解する訓練をしておくこと。正確な現代語訳をするために、単語・文法の学習を厳密に行っておくことが大切である。また、解答を簡潔にまとめる練習や和歌の学習も必要。

国語 (漢文)

東京大学 (前期・文科) 3/4

<総括>

文科 出題数	現代文2題・古文1題・漢文1題	試験時間150分
理科 出題数	現代文1題・古文1題・漢文1題	試験時間100分

例年通り文理共通問題であり、昨年は漢詩が出題されたが、本年は散文であった。一昨年は理科では第二段落が省略されていたが、本年は昨年と変わらず理科での省略はなかった。設問数については昨年は枝間を含めて文科6題、理科4題であったが、本年は枝間を含めて文科6題、理科5題であった。昨年同様に空欄補充の設問は出題されなかった。また本年は、設問に関わる部分で送り仮名の省略が二箇所あった。
例年通り、答案を作成する際に内容を適切にまとめるのは容易ではない。

<本文分析>

大問番号	第三問	
出典 (作者)	劉元卿『賢奕編』	
頻出度合 ・的中等	稀。	
分量 前年比較	分量 (減少・変化なし・増加) 文科は169字。昨年は218字 (昨年より49字減)。理科は169字。昨年は218字 (昨年より49字減)。	
難易 前年比較	難易 (易化・変化なし・難化)	

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
第三問 (文科)	説話	(一)			
		a	記述	やや易	現代語訳。「神」「於」に注意する。
		b	記述	標準	現代語訳。「須」に注意する。
		c	記述	易	現代語訳。「不如」に注意する。
		(二)	記述	標準	理由説明。傍線部を含む会話箇所を要領よくまとめる。
		(三)	記述	やや易	現代語訳。強意の「又」と「如〜何」に注意する。
		(四)	記述	標準	内容説明。「東里丈人」の発言と、第一段落の内容との対応に注意する。
第三問 (理科)	説話	(一)			
		a	記述	やや易	現代語訳。「神」「於」に注意する。
		b	記述	標準	現代語訳。「須」に注意する。
		c	記述	易	現代語訳。「不如」に注意する。
		(二)	記述	やや易	現代語訳。強意の「又」と「如〜何」に注意する。
		(三)	記述	標準	内容説明。「東里丈人」の発言と、第一段落の内容との対応に注意する。

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

本格的な漢文の読解力が要求されているので、基本句形や重要単語の習得と十分な問題演習が必要である。加えて漢文の背景となる思想や歴史などの知識も学んでおきたい。
細心の注意を払って文脈を読み取り、簡潔で過不足のない答案を作成する訓練を怠らないこと。
漢詩もたびたび出題されるので、文科、理科ともに漢詩の対策も必須である。

国語(現代文)

東京大学 (前期・文科) 4/4

<総括>

文科 出題数	現代文2題・古文1題・漢文1題	試験時間150分
理科 出題数	現代文1題・古文1題・漢文1題	試験時間100分

随筆家・小説家として知られる幸田文のエッセイ。第四問は芸術家や作家による随筆からの出題が多く、そうした意味では今年も例年の傾向どおりの出題だが、東大第四問でこうした古い文章の出題は珍しい。ただし、答えにくい問題の多かった昨年に比べると、全体としてはやや平易な出題になったといえるだろう。

<本文分析>

大問番号	第四問 (文科のみ)
出典 (作者)	幸田文「藤」(『学鑑』1971年7月)の一節。後に『幸田文全集 第十九巻』(岩波書店1996年)および『木』(新潮文庫1995年)に所収。
頻出度合・的中等	入試で頻出する筆者の文章である。
分量 前年比較	分量 (減少・変化なし・ 増加) 約2750字。昨年よりも約640字増加。
難易 前年比較	難易 (易化 ・変化なし・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
第四問	随筆	(一)	記述	やや易	傍線部内容説明。「父」が子供たちに植木を与えた話と、「木の葉のあてっこ」をさせた話を盛り込みつつ、「世話をやいた」の内容を説明する。
		(二)	記述	標準	傍線部内容説明。いつも連れ立っている「姉」と「父」とに「置きり」にされている、「私」の気持ちを説明する。
		(三)	記述	標準	傍線部理由説明。「こういう指示」の内容と、それが「おもしろかった」理由を答える。とくに傍線部を含む段落の最後の二つの文に注目。
		(四)	記述	やや難	傍線部内容説明。最終段落の内容と、「飽和」がどういうことを意味するかを説明する。情景を丁寧に描写すると解答欄に収まらないため、ある程度思い切って簡潔な表現でまとめる必要がある。

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

文学者・芸術家のエッセイを含むさまざまなタイプの文章に積極的にふれ、高度な読解力を身につけること。何が問われているかがわかりにくい設問も多いため、解答の方向を正確に見定め、答えるべきことをわかりやすく簡潔な表現で自在に説明しうる表現力を養う必要がある。